

氏名	橋本美香
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第146号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉パウル・ヒンデミット《Lieder mit Klavier op.18》における一考察

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	寺谷千枝子
(副査)	〃	〃	(〃)	伊原直子
(〃)	〃	〃	(〃)	多田羅迪夫
(〃)	〃	〃	(〃)	檜山哲彦

(論文内容の要旨)

本論文の目的は、これまでにほとんど光の当たることのなかった《Lieder mit Klavier op.18作品18》に代表されるヒンデミットの歌曲について、元ピアノ弾きであり現在歌手の立場としての視点から分析・紹介するものである。またヒンデミット自身が《作品18》を自信作としていた理由についても考察し、「ヒンデミット＝器楽だけでなく、歌曲の作曲にも優れた作曲家」であることを主張したい。本論文によって他の作曲家にはないヒンデミット独特の魅力が見え、複調・多調や4度和声などのもたらす立体的な響きの楽しみ方も見えてくるであろう。

ヒンデミットの名を有名なものとしたのは器楽の為の曲が主であり、歌曲では15曲からなる歌曲集《マリアの生涯》以外ほとんど知られていない。多作で知られるヒンデミットであるが、それは器楽曲の話であり、歌曲をも多数残していた事自体、あまり知られていないのである。ヒンデミットが残した声楽曲にはオペラもあり、歌曲もあり、13曲のモテットもあり、また膨大な数の合唱曲もあり、また生涯に渡って歌曲の作曲に携わっていた。《マリアの生涯》だけはその名を知られているが、演奏家の立場からヒンデミットの数ある歌曲を歌い、分析してみると、彼の他の歌曲にも同じような傾向を持つ作品があることがわかり、それらがヒンデミット節ともいえる特徴であることもわかってくる。たまたま《マリアの生涯》は15曲もの大きな歌曲集なためにこのように大きくとりあげられ賞賛されやすい傾向にあるが、実際歌ってみた者としてこの《作品18》に対しても《マリアの生涯》に劣らない重要性を感じ、もっと詳しく述べる必要性を感じたのである。

第一章の第一節において初期の歌曲から《作品18》までの先行研究について、第二節においては作曲を習い始める前に独学で書いた《ソプラノあるいはテノールの為の7つの歌曲》から《作品18》までの音楽的な流れを演奏家の目から独自に見直すものとする。第二章においては《作品18》の全8曲を細かく楽曲分析し、その構造や音楽的效果を探るものとする。また、第三章においては第二章の楽曲分析と実際の体験を元に《作品18》の演奏時の工夫と実践、そしてその演奏効果などについて検証する。

(総合審査結果の要旨)

「パウル・ヒンデミット《Lieder mit Klavier op.18》における一考察」として、演奏の機会の少ない《Lieder mit Klavier op.18》を作曲家ヒンデミットの最も重要な作品のひとつであるという視点か

ら、この作品の楽曲分析と演奏論を集中的に深く掘り下げた論文である。

あえて的を広げず、作品をしぼり徹底的に解明研究しようとする一貫した意欲的な論文である。ピアノ科を卒業しピアニストとして伴奏活動を経て、声楽に転向した経験により、楽曲分析では特にピアノ伴奏部分に焦点を当て、ヒンデミットが「Lieder mit Klavier」（本論文では「ピアノ歌曲」と訳されている）と題した意図に注目し、ピアノは伴奏ではなく共に音楽をするDuoと考えたのだとする主張を裏付ける、綿密で鋭利な研究は注目に値する非常に質の高いものである。

第三章では演奏論に及んでいるが、ピアニストとして又声楽家としての両視点からこれまでのヒンデミット研究や演奏の経験から、具体的かつ実践的に自身の言葉で述べられており、ヒンデミット入門書として役割をなしている内容になっている。

時折口語体に過ぎる箇所のある文章が気になるが、演奏家の感性の自然な語り口としてわかりやすいと同時に細かく解明されたヒンデミットへの思いが強く伝わる論説である。

論文作品は前回にすでに演奏されているため、学位審査演奏会ではヒンデミットの「九つの英語歌曲」より「Echo」（やまびこ）他3曲、「歌曲（1942）」より「Ich will Trauern lassen stehn」（私は悲しむのをやめよう）他5曲、「Das Marienleben」（マリアの生涯）より6曲が演奏された。

掘り下げの深いヒンデミット研究の土台の上に立った説得力のある演奏だった。時折声質に疲れを見せたこと、英語、フランス語のディクションが明瞭さに欠けること、より広がりのある表情の豊かさなど改善の余地を残すが、多角的な音域を交差するテクニックと、特にドイツ語の詩の解釈と語りに表現力を持った安定感のある水準の高い演奏であったと言える。

論文、演奏ともに学位取得にふさわしいとし「合格」と判断した。